

回 posterior fossa の decompression に加え cerebellar tonsil が下垂しているレベルまで laminectomy および laminoplasty を施行し dural band の廓清を行い良好な結果を得た3例を報告する。

3例全てにおいて術前に認められた症状は術後軽快した。術後の syrinx の縮小に関しては、術前 C2-3 に限局する syringomyelia を認めた1例では MRI 上、変化はなかったが、上位頸髄から中位胸髄まで及ぶ広範囲な syringomyelia を認めた2例では2例とも術後 syrinx の縮小を認めた。

dural plasty を施行しなくても decompression と dural band の廓清のみで症状の改善と syrinx の縮小が期待できると思われる。

〇-34) 二分脊椎の手術

—術前評価と術中モニタリングについて—

前野 和重・小林 亨
荒木 忍・浅利 潤 (福島県立医科大学)
松本 正人・児玉南海雄 (脳神経外科)

目的：当科で経験した11例の二分脊椎の手術上の問題点につき検討した。

対象および方法：症例は myelomeningocele が8例、lipomyelomeningocele が3例で、手術施行年齢はそれぞれ生後2か月から3歳6か月(平均1年9か月)、生後1日から49日(平均16日)であった。術前評価には MRI, Helical CT を用いた。また、術中神経刺激装置を用い肛門活約筋、下肢筋電図、脊髄誘発電位をモニタリングした。

結果：術中モニタリング導入以前の1例で paraparesis が出現した。また、導入後の1例で urinary incontinence が出現した。他の症例では手術による新たな神経脱落症状は認めず、1年～10年の follow up で経過良好である。

考察：MRI, Helical CT による術前評価は有用であった。下肢の運動機能および膀胱の機能を確実にモニタリングする方法の開発が必要と思われた。

〇-35) 頸椎椎体を移植骨として用いた頸椎前方固定術の手術成績の検討

滝上 真良・齋藤 孝次
久保田 司・本田 修 (釧路脳神経外科)
馬場 雄大 (病院)

〔目的〕1990年10月に頸椎疾患に対する前方アプローチ法として頸椎椎体より採取した骨片を用いて椎間固定する前方固定術を採用して以来52症例を経験したのでその手術成績、利点、問題点につき検討したので報告する。

〔対象〕対象は1990年10月から1993年11月までに当院にて手術がなされた52例で、性別は男34例、女18例、年齢は27から72才まで平均51才、疾患別内訳は頸椎症36例、頸椎椎間板ヘルニア11例、頸椎後縦靭帯骨化症5例である。罹患レベル別には C_{3/4} 4例、C_{4/5} 16例、C_{5/6} 41例、C_{6/7} 21例で、手術椎間数は1椎間26例、2椎間27例、3椎間1例である。〔結果〕術後経過観察期間は平均12.7カ月で日本脊髄外科研究会 Neurosurgical Cervical Spine Scale によると術前平均10.9点から術後平均12.9点へ、改善率は平均64.4%であった。〔結論〕本法は広い術野が得られるため安全、確実に除圧することが可能で特に広範な病変に対し有用であるが、いかに適切な骨片を採取するかが手術のポイントと思われた。

〇-36) 頸椎椎間板障害例に対する前方除圧術—前方除圧後の自家椎体・椎間板ユニットの再移植術—

井須 豊彦・馬淵 正二
蓑島 聡・中山 若樹 (釧路労災病院)
新野 正明 (脳神経外科)

今回、我々は、頸椎の可動性を温存させる目的で、頸椎前方除圧後、自家椎体・椎間板ユニットの再移植術を行い、良好な手術結果を得ているので報告する。対象は、頸椎椎間板障害14例である。年齢は27歳～61歳、平均49歳であり、男性8名、女性6名である。手術椎間数別では、1椎間12例、2椎間2例である。手術は手術椎間レベルにて、12～13mm×15mm×13mm(厚さ×幅×高さ)程度の椎体・椎間板ユニットを Williams microsurgical spinal saw により採取した後、椎間板ヘルニア並びに骨棘を摘出する。その後、椎体・椎間板ユニットを再移植して手術を終了する。術翌日より離床し、2ヶ月間、頸部カラーを着用させた。術後経過観察期間は、1ヶ月～1年1ヶ月、平均6ヶ月であるが、術後経過は良好で、全例、症状が改善した。術後 X-P 上、手術椎間板レベルの可動性は保たれていた(術前よりは制限)。